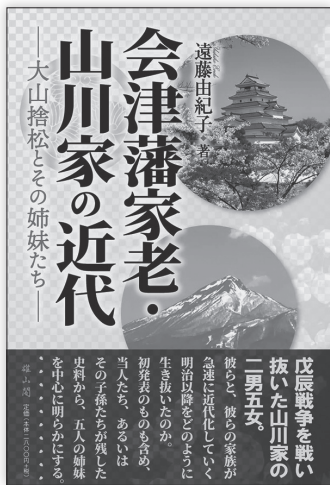


遠藤由紀子著

『会津藩家老・山川家の近代 ―大山捨松とその姉妹たち―』

(雄山閣／2022年)

松田 忍



戊辰戦争の敗者たちの生き様は日本近現代史の歩みに確かに息づいている。幕臣出身の大鳥圭介・榎本武揚、盛岡藩の原敬、仙台藩の後藤新平・斎藤実など、敗者から這い上がり、歴史に名を残した人物は数多く存在する。

会津藩の山川家もその一つであり、本書は山川尚江と艶夫妻のもとに生まれた二男五女たちのファミリーヒストリーを扱った伝記的研究である。鶴ヶ城の籠城戦において家老一族として藩中を督励し、長男浩の妻登勢の壮絶な戦死をも経験した山川家のその後の足跡が詳細にわたって明らかにされている。

本書の目的として、「近代国家形成期を敗者の立場から明らかにすることで、新たな歴史像を構築」(14頁)することを著者は掲げているが、その試みが成功したのか否かをここでは考えたい。

まずは章構成を確認する。

- 序 章 山川家の兄弟姉妹
- 第一章 長女二葉の生き方
- 第二章 次女ミワの生き方
- 第三章 三女操・四女常盤の生き方
- 第四章 五女捨松の生き方
- 第五章 次男健次郎の妻柳と嫁良の生き方
- 終 章 おわりに

章構成を一見して分かるとおり、本書で注目するのは女性たちの歴史でもある。戊辰戦

争時に鶴ヶ城への敵前入場を果たした智将として著名な長男浩（大蔵）は章には入っておらず、東京大学総長として知られる次男健次郎の名前は五章に挙げられているが、あくまでも分析の焦点は妻卿と嫁良にあてられている。女性たちに関する歴史史料が限られているなか、断片的に残された史料を渉猟しつつ、オーラルヒストリーに真摯に取り組んだ上で執筆された本書には、これまで明らかにされなかった女たちの「生き方」を世に示したいとの著者の強い想いが感じられる。

福島出身の著者は「会津が、福島が、故郷が好きなのである」と記しており、「会津の復権」に向けての著者自身の「意地」が本書の基調になっているように感じられた。本書の刊行は、遠藤氏を除いては成し得なかった大業であろう。

さて山川家の女たちの人生は必ずしも広く知られていないと思われるので、各章を振り返りながら「生き方」を確認する。

長女二葉は早くに亡くなった父尚江の死後、母艶とともに弟妹たちの面倒をみることになる。明治期になると二葉は上京し、東京女子師範学校寄宿舎長となった。さらに共立女子職業学校の発起人となり「自活する」女子を育成する女子教育に尽力したことが描かれる。その教育方針は二葉自身の言葉として「ドンなに学問ばかり出来ても婦人の道を尽くさない様な事であっては決してはならぬ」(77頁)、「ドンなエライ人物になっても身体が悪くなつては折角学んだものが何にもならぬ様になる、自分の身体のみならず国家に対しても済まぬ」(78頁)として示される。(第一章)

次女ミワは会津藩士桜井政衛に嫁いだあと、会津藩の斗南藩移封に付き従い移住し、斗南廃藩後は政衛が小学校教員をするなどして家計を立てた。さらに1886年頃には屯田兵として志願した桜井家の一員としてミワも根室に移住し、永らく北海道で暮らしたあと、晩年は子を頼りながら各地を転々とする。こうしたミワの「生き方」は桜井家に残された私家版史料を駆使して描かれている。ミワおよび五男五女の子どものたちの苦難に満ちた生き様を明らかにしたのは著者の大きな功績の一つだといえる。(第二章)

三女操は会津藩士小出光照と結婚するが、間もなく光照は佐賀の乱で戦死する。夫の死後、操は学習院で教鞭を執り、1880年には、特命全権大使として露西亜に赴任する柳原前光の夫人初子の世話役として同行した。この時身に付けたフランス語の素養が認められ、1884年には宮内省御用掛に任命され、皇后美子（昭憲皇太后）に仕えることとなった。本書では『昭憲皇太后実録』などを利用しながら、明治天皇からの操に対する信頼などについても触れられる(第三章)。

四女常盤は「記録が一番乏しい」(150頁)とされるが、周辺人物の記録を用いながら、その生涯が描かれている。常盤は、会津出身の徳力徳治と結婚したあと10人の子どもの恵まれた。徳治は法曹の道を進み、日本各地の裁判所で検事を歴任しており、常盤もそれに従って転居を繰り返したと思われるが、その没年も不明とされる。(第三章)

五女捨松は父尚江の死後誕生した。1871年、11歳のとき岩倉使節団の女子留学生として津田梅子らとともに派遣され、11年間のアメリカ長期留学を経験した。捨松は現地の

学校に通い、1882年にはヴァッサー大学を卒業し、さらに甲種看護婦免許を取得後、梅子と共に帰国した。鶴ヶ城籠城戦で敵味方の関係であった大山巖と1883年に結婚する運命をたどりつつ、華族女学校の設立などの教育事業、貴婦人の社会福祉事業、さらには日本における女子看護の立ち上げに大きな役割を果たした。さらには女子英学塾の開塾にあたっては梅子と並ぶ中心人物の一人として活躍したことが示される。(第四章)

健次郎の妻御と嫁良については、初音町に大屋敷を構え、会津から大勢の書生を引き受けた健次郎家を切り盛りした様子や、旅行や笑い話など家族間などのエピソードを交えつつ、その生涯が生き生きと語られている。(第五章)

以下、全体を通読した印象を3点述べる。

まず明治期における山川家の活躍を支えた基盤が教育の力であったことが示された。兄弟姉妹たちがつねに立ち返るのは、山川家における躰であり教育であった。また兄弟姉妹たち自身が公的にも私的にも後進の育成に取り組んだことは印象深い。東京師範学校寄宿舎長として数多くの寮生に薫陶を与えた長女二葉、十数名の書生を自宅に抱え続けた三女操、女子教育や女子看護に尽力した五女捨松、大屋敷を購入して会津の子弟たちを書生として数多く受け入れた二男健次郎など、人と人とのつながりのなかで、山川家の教育理念が日本の近現代を生きた多くの人びとに受け継がれていったものと思われる。

次に、兄弟姉妹たちの人生に、「賊軍」とされた会津人としての悲哀があまり感じられないことが特徴的であった。鶴ヶ城籠城戦から斗南藩に至る苦難の生活は、兄弟姉妹の多くに共通する人生経験であった。しかし五女捨松と薩摩出身の大山巖の結婚のときを除いては、歴史のいたずらで逆賊とされたことに対する恨み言は示されない。むしろ各人の胸に秘められた若き日の逆境への想いこそが、会津人として受けてきた教育を後進に伝える原動力になったことが本書の随所で感じられた。

最後に、山川家の人びとが海外経験や学問研鑽を契機にして官の道につき、家運向上を果たしていることも特徴的であろう。戊辰戦争後、東北諸藩(諸県)の多くが海外から外国人教師を招き、藩士教育に力を入れたことが知られている。明治政府は極度の藩閥主義ではあったが、その一方で明治時代の日本が教育次第で這い上がれる社会であったことも本書は教えてくれる。

以上3点を踏まえて、「近代国家形成期を敗者の立場から明らかにすることで、新たな歴史像を構築」することに本書が成功しているのかと問われればYESと答えたい。会津人の心を引き継ぎ、高いレベルの伝記的研究を完成させた著者に、心から賛辞を述べたい。

(まつだ し のぶ 歴史文化学科准教授)